

精神障害者のセルフ・ヘルプ・グループの意義と課題

— ある二つのセルフ・ヘルプ・グループの事例比較から —

The importance and task of the mentally disabled
person's self-help group

— Comparing two self-help-group cases with each other —

早野 禎 二*

Teiji HAYANO

キーワード：セルフ・ヘルプ・グループ、専門家、福祉文化、当事者主体

Key Words : Self-help-group, Specialist, Social welfare culture, Independence of the person concerned

要約

一つの精神障害者セルフ・ヘルプ・グループから派生した二つのセルフ・ヘルプ・グループの事例を比較検討しながら、セルフ・ヘルプ・グループにおいて、支援者が形成期において役割を果たすが、やがて支援者と当事者の間に距離が確保されることによって自主性を獲得していくこと、また、活動が安定性と継続性を持つためには、場所や財政の問題の他に、内部における民主的な運営と外部機関・団体との協力関係が必要であることを明らかにした。そして、事例としてとりあげたものは、グループとして病院などの上位団体を持たず、それだけで自律し、自主性を持ったグループという特徴を持っていること、メンバーの中には、他の複数の団体やグループに属しながら、活動を行っているものがあり、このセルフ・ヘルプ・グループが、運命共同体的で、排他的ではないところに大きな特徴があることを明らかにした。

それぞれのグループは、作業所運営や企画運営など能動的な性格を持つ集団と親睦を目的とした集団という特徴を持ち、いずれも当事者主体とした福祉文化を形成していることを論じた。

Abstract

The subject is the formation and development process of a mentally disabled person's self-help-group and its meaning. In this case study, I examine the purpose of organization, the features, the way of administration, finances, the problem of the place for acting, the role and involvement of the specialist and the volunteer, the relation to

* 東海学園大学経営学部経営学科

the external administrative welfare organ, the relation to the top group and the features of membership. I make clear the process that mentally disabled persons in the self-help group become independent and result in problems. I also consider the action of the group mainly composed of mentally disabled person and what is the welfare culture of their own.

1 はじめに

この論文では、精神障害者のセルフ・ヘルプ・グループの集団・組織の生成過程、発展過程における特性とその役割及び課題について論じていきたい。具体的に事例を検討し、そこで、障害者がセルフ・ヘルプ・グループの活動を通じて、自主性をどのように獲得していったかという点を中心に見ていきたい。事例で扱う二つのグループの形成と発展過程の歴史を追いながら、組織目的と組織特性、運営方法、財政、活動場所の確保、専門家、ボランティアの役割と関与のあり方、外部の福祉行政機関及び福祉団体との関係、上位団体との関係、メンバー構成員の組織所属のあり方などを検討し、セルフ・ヘルプ・グループが、どのように自主性と自律性を形成するようになったか、あるいはそれが、どのような原因で、阻害が生じたのかを明らかにしていきたい。そして、精神障害者の当事者主体の活動とは何か、精神障害者の福祉文化とは何かという問いについて検討していきたい。

以下、2では、先行研究の検討を行い、3で研究方法について述べ、4では、患者会X会の立ち上がりと初期の活動について述べ、5では、そのX会から立ち上がったNPO団体U会の活動の生成と活動内容及びその組織課題を論じ、6では、U会分離後のX会が、民主的な運営のなかで和の原理を持ちながら自主性と自律性を形成していく過程を見る。考察では、それぞれのグループの特性を整理しながら、セルフ・ヘルプ・グループの意義と課題について論じていく。二つのグループの特徴として、上位団体を持たない精神障害当事者主体の団体であり、それぞれ目的は異なるが、自主性を持って精神障害者の福祉文化を作ろうとした団体であることを明らかにしていく。

2 先行研究の検討

セルフ・ヘルプ・グループの歴史は、久保によれば、欧米では1930年代後半、日本では第二次大戦後の1950年代になってからであるとされる。北米では、1935年に設立されたAAアルコール依存者の会が始まりで、精神障害者の回復を目的とするリカバリー協会は1973年にすでに設立されている。脳性マヒ協会は1947年設立である。1950年代から1960年代にかけて公民権運動の流

れのなかで、セルフ・ヘルプ・グループが増大した。1960年代から1970年代にかけては、障害者の権利運動、ゲイの人たちの権利運動が発展、1990年代には、慢性疾患、精神障害者の回復者グループ、エイズのセルフヘルプグループが多く設立されるようになった¹。

日本では、1948年、日本患者連盟（結核）、1951年、全国ハンセン氏病患者協議会が設立され、医療・生活保障などの要求運動、社会的なスティグマを負った人たちへの偏見の除去などの活動を行った。さらに、1963年、サリドマイド児親の会、1969年、カネミ油被害者の会、1974年、水俣病患者同盟などが生まれる。1960年代後半から1970年代にかけて、障害、疾病、難病、アディクション（嗜好）のグループが設立されている²。

久保は、セルフ・ヘルプ・グループに共通してみられる特徴として次の点をあげている³。

① 人間同士の感情の開放と支え合い

② メンバーが成長する

他者を援助することで、結果的に援助する人が利益を得ている。すなわち、自分が積極的な役割を担うことによって、新しい経験を獲得し、それがその人を成長させ、自信を得させる。

③ モデルとなる人に出会う

自分の生き方のモデルとなる人に出会い、将来の予測ができる。

④ 役に立つ情報が得られる

社会の中で自分達の置かれている現実（医療・教育・社会福祉・就労など）を知り、学び合うことができる。

⑤ 社会に向けて働きかける。関連する制度を作る

日本のセルフ・ヘルプ・グループの特徴を欧米と比較して論じているが、岡の「日本のセルフヘルプグループの基本的要素」「まじわり」「ひとりだち」「ときはなち」⁴である。

岡は、「まじわり」は「あつまり」と同じではないという。同じ障害者が同じ場所に集まればセルフ・ヘルプ・グループになるのではなく、いかにすれば「ひとりだち」ができるかを具体化し、明文化した共通した「プログラム」を理解し、個々実行するときに「まじわり」を持つとする。それはアルコール依存の「12ステップ」、障害者の「自立生活プログラム」である。「あつまり」には「つきあい」があり、情緒的一体感を保つために同調することが期待される。ミーティングの後にも「つきあい」があり、個人が匿名で参加できるAAとは異なる⁵。

岡は、日本の集団の特徴として、西欧の人間関係の契約主義に対して、非限定的な情緒的な一体感にあるという。この非限定性は、包み込みながら周辺を排斥する。このような特徴から岡はワーカーとクライアントとの関係について次のよう述べる。ワーカーとクライアントは、契約関係というよりは情緒的な関係があるために、クライアントはワーカーの提案を拒否することは難しい。一人、反対することは、排斥される可能性がある。クライアントは、誰一人としてセルフ

ヘルプグループの本質を理解しないまま、グループを始め、ワーカーはそれを背後から見ているという関係が生じる⁶。

また、集団の人間関係の非限定性のために、複数の集団に同時に属することが難しくなり、一つの集団の上に重なるように、新しい集団を作るようになる。デイケアグループの卒業生がそのままセルフ・ヘルプ・グループになったりする。日本の集団の特徴として「既存集団丸抱え」というものがあり、最初の集団のヒエラルヒー構造がそのまま新しい集団にも影響を与える。病院の中にひとつの院内患者会を作った場合、そこに病院内のヒエラルヒーが反映される。複数の集団に属することが難しいとしたなら、現在属している集団が唯一のものとなる。従って集団が運命共同体になる。その集団しか選択できない時、そこから抜け出す事ができず、集団の情緒的一体感を傷つけないように「つきあい」に気を配る。ウチ・ソトを厳密に区別するために複数のグループを「渡り歩く」ことは難しい。そこでは、「ひとりだち」はできない。「ひとりだち」とは各自の「まじわり」の主体的選択であるとされる。その「まじわり」の主体的選択を可能にさせるのが、「ひとりだちのしかた」が明文化された「プログラム」の存在である⁷。

次に、精神障害者のセルフ・ヘルプ・グループの特徴について見ていきたい。

精神障害者の患者会の歴史は、河野によれば、以下のとおりである。

家族会は、ライシャワー事件を契機にした精神衛生法改訂に際し結成された世界初の精神障害者の家族会の全国組織が1965年に結成された。当事者の活動は、1950年代、精神病院内に患者自治会活動が始まり、1960年代～1970年代に様々な形の患者会組織が各地に作られるようになった。1980年代には患者組織間の連絡が進展し都道府県レベルでの組織が形成されるようになる。1993年に全国精神障害者団体連合会（全精連）が結成され「ひとりぼっちをなくす」ことを原点としている⁸。

精神障害者のセルフ・ヘルプ・グループの活動の実態について、少し古いが1988～89年に行われたアンケート調査に基づく研究から見ていきたい⁹。

この調査によれば、会の発足で最も古いものが1967年で、調査時点で1979年から1985年が発足のピークになっている。しかし、断酒会や家族会は、1950年代前半から活動を始め、1960年代前半には、それぞれが全国組織をもっていたことと比較すると、当事者のセルフ・ヘルプ・グループの発足の遅れが指摘されている。

グループの類型化では、当事者と専門家よりなるグループが、半数を超え、専門家は、精神科医の医師、看護職、保健婦、ケースワーカーからなる。代表者がいない会が、4割で、精神障害者の当事者グループの特徴であるとしている。会則がない、会員規定がない、会費がない、役員制がないという組織度の低さが特徴であるとされる。

日常の活動以外としては、行事的活動として、忘年会、新年会、ハイキングである。会報・機関誌ありが半分弱で、他の精神障害回復者の当事者グループとの交流にその会報や機関誌が用い

られている。会員相互援助活動としては、相談、入院見舞があげられている。

主な収入源は、7割を会費でまかなっているが、思うように集まらず、実際にはカンパを有力な収入源としている。会員の多くが生活保護受給者の場合、月にわずかの会費すら集まらないことがあり、経済的な困難に常に直面しているとしている。

専門家との関係を見ていくと、専門家が会の発足時に果たす役割が大きいとしている。しかし、会が専門機関・専門家を離れたことによって、場の確保や経済的な面での大変さが生じたが、会の存続が危ぶまれたのは専門家が離れていったケースでもほんの少数であるとしている。専門機関・専門家が離れたことにより自主性が育ち、当事者が転機を好機にしていると分析している。専門家の援助が必要なのは、発足時と専門家の知識・情報が必要になった時、及びリーダーが困った時であり、普段は距離をとり、当事者が援助を求めた時は十分に応えてほしいとしている。

会の運営でもっとも大切にしていることは、「常に自由で、過度に活動し、頑張らない」が最も多く、「どんな症状の当事者も受け入れ、社会から孤立する人をなくす」が次に多い。当事者にとっての当事者グループの意義は、精神病院へ入院という体験を共有している仲間と「心から憩えてリラックスできる場」であると答えたものや、「自己実現できる場でもあり、自分も他人のために何かできる場」「いつも家ではお荷物になっていた私が会で困っているメンバーの相談にのれたことは大きな自信となった」と評価するものがあった。そこには、援助することによって自分も援助されるという関係が見られるとしている。

次に、北海道にある早くから活動している精神障害者の患者会「すみれ会」の活動についてみていきたい。

河野は、「すみれ会」の活動を以下のように報告している¹⁰。1970年、北海道精神衛生センターの社会復帰学級の卒業生4人が、センターの職員の指導のもとに集まったことが会の始まりである。しかし、最初は「センターがいうまま」で、「自分たちでは何もできなかった」ということで、次第に参加者の数が減るようになる。存亡の危機となり、話し合いが行われ、「一人でも来るということは、必要だから来るのだ」という認識が転機になって活動を発展させていく。

「すみれ会」は共同作業所が2つある。運営委員会の委員長は「すみれ会」の会長が兼務している。指導員は会員で精神障害者自身が運営に関わっている。参加者は少額の作業手当が支給される。日常的活動は週5日で、憩いの場の提供、生活と年金の相談、スポーツ、カラオケ、会報の発行を行っている。月に1回の例会を行っている。また、毎月、役員会と幹事会が開かれ、運営上のことが協議され、必要事項が決定される。年に一度、総会が開かれ、1年間の総括が行われ、今後の方針が決定される。モットーは、「のんき、根気、元気」で、当事者の決定を重視している。財政的には、収入は会費（年額3000円）、賛助会費、事業収入、助成金、寄付金が収入源であり、支出は、会報の印刷製本代、役職手当などにあてられる。収入の7割が市からの補助金である。

会員の大半は、精神病院を退院した後、親元で暮らす人、単身アパート生活の人で、結婚している人もいて、会員同士の結婚もある。障害年金や生活保護で暮らしを立てている人が多いとしている。例会やレクリエーションだけに参加したり、会報だけのつながりの人もいる。

著者は、「すみれ会」が発展したのは、センターが当事者組織の育成と支援を当初から重視したこと、専門職間の強い連携のもとで密接にかかわったこと、各保健所、医療機関による援助、専門職団体の協力、行政による財政的支援、道生連の役割をあげている。

3 研究方法

2では、セルフヘルプグループに関する先行研究をみたが、4以下では、実際に事例を検討しながら、論点を整理していきたい。ここでとりあげるのは、X市で活動を続けている患者会である。以下の記述は、実際に筆者が活動に参加しながら、参与観察を行ったものに基づいている。6については、参与観察を行いながら、中心メンバーからのヒアリングを行い、それに基づいて記述した。

4 患者会 X 会の立ち上がりと初期の活動

(1) 立ち上げ期

S会という保健所がやっていた社会復帰を目指した在宅者を中心とした社会復帰グループで創作教室や料理教室をやっていた会があり、月2回ほど活動していた。そして、病院のソーシャルワーカー、元ソーシャルワーカー、保健所のソーシャルワーカーが参加し、作業所を作る上での実績作りとして家を借りて活動を始める。そこでは、昼食会や、おやつ会など週2回くらいのペースで行っていて、ボランティアや保健所の職員などが関わっていた。

その作業所の隣に家が空いていたので借りてフリースペースができる。会員制度をつくり、夕食会などを行う。後の重要な支援者であるOさん（女性 40代）が関わるようになる。専業主婦の立場からボランティアとして関わっていた。Oさんは、ある大学が行っていた精神保健ボランティア講習を受けていた。当時はメンバーより支援関係者のほうが多かったが、だんだんと定着していった。メンバーは、市内の他の作業所から来た人、病院のデイケアや保健所の利用者などであった。支援関係者は、作業所の職員や、病院のケースワーカー、学生であった。保健所の相談員のFさん（男性 40代）が中心になって会報を出していた。Fさんの話によると、この会は当初、患者のフリースペースを作ることを目的として作られ、将来的に患者会にしていくことを目的として作ったのではなかった。市の方に補助金などの支援を要求したが受けいられず、賛助会費でまかっていた。そして、患者から二人の代表者を選んで会の運営を行っていた。後に

会の代表になるSさん（男性 40代）はこの頃に参加した。

(2) 援助の模索期

やがて、家賃が払えなくなり、場所を家賃の安いところへ移動し、そこで夕食会、昼の会などを行う。場所を移した背景には場所を借りる資金の問題があり、市からの援助がないという問題点があった。この会は、家族会とは直接、関係はない患者会活動だった。FさんとOさんが中心になって、活動を続ける。また、大学教員Cさんも協力していた。Fさんは、保健所の精神保健福祉相談員で、Oさんが、ボランティア的な関わりであった。ここでは、X会の活動が、週何日か行なれ、また、夕食会も持たれていた。しかし、FさんとOさんの路線の違いが生まれ、別々の日に活動がなされるようになる。Fさんは専門職の立場で接し、Oさんはボランティア的な立場で、精神障害者の世界に入っていこうとしていこうとしていた。

(3) ボランティアによる非専門的支援期

やがて、Fさんが手を引くと、場所を変え、Oさんが、全面的な資金提供者になり、マンションの一室に部屋を借りて、そこをX会の活動の拠点とした。週3回、会が開かれるようになった。また、X会とは別に、Lと同じ場所で立ち上げ、Oさんが中心になってビーズ細工など自主製品を作り、病院や駅のコンコースでの販売、委託で、施設や喫茶店に置いた。行政からの認可はなく補助金をもらっていなかった。作業は順調に進み、売り上げも順調であった。筆者はこの頃からX会の活動に関わるようになった。

しかし、Oさんが、事情で、名古屋市から離れることになり、X会は、Oさんから部屋代として資金を支援として受け取ることはできたが、Oさんは週に一度ほど訪ねることになり、実質的に当事者が自分たちで運営をしていかざるを得なくなる。Lもたたまざるをえなくなる。その時、今後、X会をどのようにしていくかが内部で話し合われた。そこで会の存続の危機感から自分達で何とかしなければならぬという意識が生まれ、次に見るU会の発足と、X会に残ったグループの再生につながっていった。

OさんのX会に果たした役割を見ると、単に資金面の援助だけでなくメンバーに患者会を作るように働きかけたことが、その後のX会から発展したU会と残ったX会の活動の発展につながっていった面があると言える。のちのU会代表のMさん（男性 40代）、X会の代表のSさんも、Oさんがいなかったら、U会もX会もなかったとしている。Sさんは、Oさんから患者会を作るように言われ続けたことが、その後のX会の活動につながっているという。特に資金的援助は、大きかったと言えるが、そのようなボランティアの経済的支援に頼らなければ、患者会の活動が維持できなかったということは、市の支援体制の問題にあったと言える。

Oさんは、健常者の世界よりも精神障害者の世界に自らは共感を覚えると語っていた。健常者

の世界にいるよりも精神障害者の世界にいるほうが自分は自然になれると語っていた。そこには、単なる障害者を「援助する」という立場とは異なる、健全と障害の区別を超えた関係のなかに入っていこうとするOさんなりのコミットメントがあったと筆者は考える。Oさんは、専門的知識はあまりなかったかもしれないが、その知識がないがゆえに、専門家とは別の形で精神障害者の世界に入っていくことができた。専門的知識があまりなかったために、かえって、精神障害者の世界で自然になれるという見方ができたと言える。ただ、Oさんには、一人一人のメンバーとの個人的な相性で接する所があり、全体のメンバーに平等に接するものではなかったという点に課題があったというべきであろう。

5 NPO・U会の立ち上げと活動の経過

ここでは、X会の中から立ち上がったNPO・U会について見ていく。U会に参加しなかった残りのメンバーはそのままX会として活動を続ける。これは次の5で取り上げる。

Oさんが名古屋を離れると、それまで週3日の活動が、月曜日から土曜日まで拡大する。X会の代表にMさんがなった。Mさんは、躁鬱病の症状を持ち、X会の以前からのメンバーであった。食事会が行われ、通信を発行するようになった。だんだんと食事会への参加者も増え、ここでは、精神障害者が置かれている状況について活発な意見が交わされるようになった。現行の制度的な問題についても話がなされ、精神障害者が抱えている問題について率直な意見が交換されるようになった。通信を発行するようになり、メンバーが書いた文章や詩やエッセイが載せられた。

ホームページを見て、Cさん（男性 40代）が参加するようになり、以後、活動の発展を支えていくようになる。Cさんは、大手の百貨店に勤め、外商を行っていたが、躁鬱病を発症し、職を辞め、幾つかの職を転々とした後、U会に参加するようになり、事務局を担当するようになる。このCさんの事務能力、対外交渉能力、企画能力とMさんのリーダーシップが合わさって、U会はその活動に独創性と機動性を持つようになる。

やがて、活動の様子が広まり、さまざまなメンバーが集まり、会の中で、精神障害者の置かれた状況を変える活動をしていこうという雰囲気が高まっていった。精神障害者は、自分達では何もできないという偏見が、まわりにも、そしてメンバーの中にもあったと思われるが、だんだんと仲間が集まり、様々な話がされるなかで、活気が生まれ、当事者の意識も変わっていき、自信が生まれるようになっていった。

やがて、Mさんを中心にNPOをとる活動が始まる。当時、NPOで作業所をやっているところはまだ少なく、Mさんには先見の明があったというべきであろう。このMさんのリーダーシップが、NPO・U会を生み出す上で大きな力となった。Mさんが、NPOをとろうとしたのは、患

者会という任意団体では、行政に働きかけが思うようにできないが、NPOという社会的承認があれば行政も変わることに、そして、法人格を取ることによって事業がスムーズにできることがあったからだとしている。NPOの申請書類はMさんが中心になって2003年の終わりごろから書類の準備を始め、申請が受理され、2004年11月に認証を得ている。

Mさんは、このNPOを取得した時の気持ちを次のように語っている。

こうして〇〇県では初めての精神障がい者当事者が立ちあげたNPO法人としてU会は設立したのです。私たちにもできるのです。障がいを持っていようと希望を捨てずにあきらめずに挑戦していけば。

本当に、障害者が自立して生きていける福祉社会と、安心して暮らせる福祉経済が確立されなければ精神障がい者は、社会の弱者として切り捨てられてしまいます。就労問題でも現行のままでは、継続的な就労は非常に困難なのが現実です。U会のビジョンは、精神障がい者が生活していけるだけの収入の確保と居場所としての気楽に利用できる場所を提供していくことです¹¹。

このX会の中での話し合いからU会が立ち上がっていく過程は、精神障害者は社会の下位に置かれ、偏見と差別の対象となり、また自らも自分たちではなにもできず、援助の対象でしかないという社会的な劣等意識から脱し、精神障害者でも何かができる、主体的に生きることができるといふ自信を得ていく過程であった。こうしてこの地域で精神障害者の当事者主体を謳いあげる団体が立ち上がっていく。

U会のNPOの定款では、目的は、「この法人は（精神）障害者に対して自立支援に関する事業を行い、福祉及び社会参加に寄与することを目的とする。そして、事業内容としては、

- ① 精神障害者自立支援に関する普及啓発事業
- ② 精神障害者の自立支援に関する事業

相談事業（ピア・カウンセリング）、患者会の活動支援事業、障害者小規模作業所運営事業、障害者グループホーム運営事業、障害者ホームヘルプサービス運営事業

があげられている。筆者も理事として参加した。

U会の活動を振り返ってみると、実績を残したのは、その啓発活動であったと言える。まず、U会通信をあげることができる。創刊号の発行は2005年6月である。この通信は、エッセイあり精神障害者福祉に関する情報などが掲載され、エッセイでは、様々な福祉関係者へのインタビュー、当事者の声などがあり、市内の作業所や保健所、病院、そして会員に送付している。編集の中心はCさんであった。

創刊号の巻頭言にMさんは次のように書いている。

私たちが、NPO法人として行っていく事柄は、設立の趣旨にも明記してありますが、精神障害者の自立生活を支援していくことであります。今でこそ精神の疾患及び障害に対して、世間の見方が少しずつではありますが、ようやく認知され、理解されるようになってまいりました。ともすれば精神障害や精神病に対して偏見が根強く、特別視（悪い意味で）されてきました。精神病は、恥ずかしいもの、あるいは怖いものに捉えられ精神障害者は、日の当たらないところで生きてきた時代がありました。

「うつ」という言葉が、世間で多く使われるようになり、精神・神経科のクリニックに通う人が今増えています。また、入院治療が必要な人もいます。

しかし精神の疾患は、今更始まった訳ではありません。若くして、発症するケースも多くあります。原因は、様々で一概に言えませんが、そんな辛い思いをしている精神障害者に対して、人生を歩んでいく上での支援は、とても大切なことと言えます。U会の役員は、そうした意味で精神の障害を持つ人と、いわゆる健常者と呼ばれる人がブレンド（混合）して成り立っています。

障害を持つ人の視点で、進んで行きたいと思っています。障害は大きく分けて、身体・知的・精神の3つに分けられます。この中で、精神の障害に対する行政の対応が一番遅れていると言えます。いずれの障害にせよ、どれも辛く大変な思いをしながら生きています。また障害者を持つ家族も同じだと言えないまでも、等しいほどの思いでおられる事は、間違いありません。

私たちが、行っていく事業は、ある面、それは使命としてとらえなければならない事だと思います。なんのため？それは、そこに障害を持つ人がいるからです。

どんな人でも、いつ、いかなることのより精神の疾患と遭遇するかわからないからです。誰もがその可能性を持っているのです。

人に精神がある限り¹²。

U会が企画したコンサートは、5回ほど行われている。市内の劇場を借りて行われ、市民や福祉関係者など毎回150～200名程度の参加者があった。企画・立案・準備・当日の会場の運営はすべてU会のメンバーによってされていた。X会から応援も得ていた。聴衆は、当事者の人、福祉関係者、一般市民などであった。福祉的な色合いは強くなく、エンターテイメント的なコンサートであった。

また、講演会企画を幾つか行っている。2007年には、記念講演会を、行っている。2008年3月には、全精連から精神保健福祉講演会の依頼があり、うつ病の人を対象にしたJ患者会の企画・協力を得て、講演会を行っている。U会メンバーなどが当事者講演を行い、U会のメンバーがコーディネーターを行った。このような講演会やコンサートは新聞でも紹介され、地区の地域ニュー

スを伝えるホームニュースにも載り、住民の参加を得ている。

市の精神障害者現任研修の当事者講演や、身体障害者の自立を支援する団体Pの職員研修の当事者講演も行っていった。また、U会に来る当事者講演の依頼を受けて、大学などでメンバーが行き講演活動を行った。また、日本精神障害者リハビリテーション学会のサテライト企画に参加し、U会も当事者団体として活動を語っている。また、この企画の立ち上げ段階から実行委員会に入り、開催の準備を手伝っている。

2007年11月から作業所型地域活動支援事業を開始している。これは市で最初に障害者が主体になって運営する作業所となった。作業所では、午前中は、昼ごはんの買い出しと食事作り、昼から作業で、3時ごろ終了し、掃除をして4時ごろ帰る。作業は下請け作業的なものであった。施設長と理事長にMさんがなった。健常の職員が一人が雇われた。雰囲気は、当事者主体ということで和やかな仲間同士という感じを持ち、職員とメンバーの壁を低くしていこうとしていた。その意味でU会は他の作業所にはない雰囲気を作っていた。そこには、職員の下にメンバーがいるのではなく、当事者が主役であり、それぞれが仲間であるという意識が見られた。

当初は当事者のメンバーをヘルパーとして派遣する事業もやっていた。しかし、運営に不慣れなところがあり、途中で辞めている。グループホームやピアカウンセリングは、目標としてあったが、具体化することはなかった。この間、NPOとしてグループホームやピアカウンセリングをどのように進めていくかについて、理事会で話し合われたことはなく、作業所をどのように進めていくかに労力を費やしていた。

U会は精神障害者が置かれている状況を伝え、コンサートや通信の発行を通じて、精神障害者の姿を知らせ、その生き方や考えていることを情報発信する意味を持っていた。それは、ある意味、精神障害者の福祉文化を、同じ精神障害者の仲間だけでなく、行政や市民、福祉関係者に向けて発信するという側面を持っていた。それは一つの精神障害者の福祉文化運動であったと言える。その発想のユニークさは従来になかったものであり、その企画力、実行力においても、名古屋のそれまでの精神障害者のなかにはなかったものであった。このような活動が生まれた背景には、MさんとCさんの力が大きかったが、集まってきたメンバーのユニークさと、この団体は精神障害者が主体の団体であるというメンバーに共有された意識が大きく働いていたと言える。

しかし、当初の活動は、だんだんと様々な障害にぶつかり、活動の勢いが失われていった。その幾つかの原因をあげてみたい。

(1) 組織運営の問題

U会は、理事会、総会も行われてきたが、実際には、Mさんと事務局長のCさんが中心になって動いていた。U会の中の運営は、実質的な運営に関して、民主的な話し合いがうまく進められていたとはいえなかった。コンサートや企画について、話し合いが重ねられて進められたという

よりは、MさんやCさんのリーダーシップのもとに進められ、実際の企画の会場運営では、メンバーが主体的に仲間意識を持って動いていたが、事前の企画段階でメンバーが参加しての話し合いは不十分であった。

組織としては、Oさんの影響力がまだ残り、本来は、新しいNPO団体として、民主的な話し合いの場が実質的に機能することが必要であったが、運営委員会も理事会もそのような機能を果たしていたとはいえない。それまでのX会とは変わった形に組織運営を転換し、Oさんの位置もその組織の中に位置づけられていく必要があった。

また、組織運営の在り方や、グループホームやホームヘルパー、就労支援などの事業内容の具体的な目標を達成するために必要なことは何か、さらに新しい展開をどうしていくかについての事前の話し合いと準備不足があり、作業所が始まってからもそのことの話し合いが十分でないままに、毎日のルーティンワークに追われる状況であった。作業所運営に関しては、不慣れであったことが問題であり、そのようなノウハウを持っている人のサポートがあれば、もっと違った展開になっていたと思われる。

(2) 専門職との関係

U会の一つの目的であった相談業務、就労支援などでは、専門職の協力が必要であったが、一方で当事者主体というU会の理念があり、それをどう整合させていくかが大きな課題であったが、健常者である専門職員と当事者スタッフやメンバーとの関係をどのように形作っていくのか具体的なモデルがなく、それがはっきりしないままに作業所が始まり、専門職員と障害スタッフ、メンバーとの間の関係調整に労力がさかれ、専門職員の力が最後まで十分に発揮できなかった。運営委員会と理事会もその調整機能を十分に果たし得なかった。

(3) 外部の福祉行政機関・団体との関係

さらに、外部の保健所など行政機関・家族会などとの連携がうまく進まなかったという問題点がある。U会の方から、保健所に何度か訪れ、運営会議の記録なども渡しているにも関わらず、保健所からの訪問は数度に過ぎず、特に援助や支援やアドバイスがあったわけではなかった。それは、家族会の対応も同じであった。そのような関係が生じたのは、U会の外部機関と連携を作る能力が足りなかったと言える面があったかもしれない。

しかし、筆者はその原因について、当事者主体ということに対して、行政機関がどのように関わっているのか分からなかった点があったのではないかと推測する。精神障害者が従来の援助の対象としてではなく、自ら主体的に声を上げ、当事者主体という主張を持って活動を始めたことで、いわゆる「援助」ではない形での精神障害者のNPOにどうサポートしていいのかかわからず、福祉行政機関や家族会がひき、遠巻きに眺める結果になってしまったのではないかと推測する。

精神障害者は援助されるべきものであって、精神障害者が、自ら主体的に声をあげたことに、抵抗感があったのではないか。そこには、どこかに援助するものと援助されるものという上下の関係があり、その固定観念をラジカルに変えようとする動きに対する冷やかな見方があったと推測される。

確かに、精神障害者の団体として従来にない雰囲気、外から専門家や関係機関の入りにくさを作ってしまった面が確かにあるのかもしれない。精神障害者の障害特性としてのコミュニケーション障害が、関係のスムーズな構築を難しくするという問題がそこにはあったのかもしれない。しかし、U会は、当事者主体を言いながらも、外からの専門家や関係機関の協力を拒んだこともなく、むしろ、Mさんも、外部の機関との連携を求めているし、実際に支援も要請している。それは決して当事者至上主義ではなかったのである。

ここでは、精神障害者が外に向かって主体的に活動を行うという姿勢をアピールすることが、これまでになく異質な動きとして受け止められ、外部の関係機関が関係を疎遠にしていくという事態が生じていたことが推測される。そこには日本的な同質性を重んじる雰囲気があったのかもしれないが、異質なものを包摂していくことで、先進性が生まれ、活力が生じるという見方が求められると言えよう。

また、行政の側には、市から予算を下している作業所であり、また、運営を管理統括する責任は市にあったわけであるから、少なくとも、当事者たちが方向を模索している時に適切なアドバイスや援助があっただけであるべきであったと言えよう。

結果的に、この外部の福祉団体や専門家からの協力、サポート、助言が得られなかったことが、その活動の発展を阻んだひとつの原因であった。その原因について筆者の見方は推測に留まり、この点についてより詳しく調べていくことができれば、U会の活動の特徴とそれが持っていた課題の全体像がより明確になっていくと思われる。上にあげた(1)(2)の問題点も、外部からの協力サポート体制があれば、その解決の糸口も見えていた可能性がある。しかし、それがなかったがために、組織の問題に対して内向きにエネルギーを消耗してしまった点があると思われる。

(4) 制度の問題

①賃金制度の問題

制度的な問題に関しては、給与の問題がある。作業所職員には、2名の正職員を雇うことができ、給与も支給できる仕組みになっている。しかし、U会の事務局として活動していたCさんは、それが作業所業務でなかったために、その事務量が膨大であったにもかかわらず、給与が出ないという点が問題であった。U会の事務を行っても制度上無給であるという問題である。それはボランティアであり、生活費は自分で別のところで得なければならなかった。健常者ならば、まだ自分で生活費を稼ぐ余裕はあるかもしれないが、精神障害当事者の場合にそれを求めるのは無理

があると言えよう。Cさんは、障害年金が主な収入で、病気の不安を抱えていて将来への不安があり、ある程度貯金しておく必要を感じていたため、給与が出ないNPOの活動に全面的に携わることに負担があった。これは、現行のNPOの制度上の問題であると言えよう。現行のNPO制度の下で、それを使って当事者が活動を行う時、その生活が社会福祉的に保障されていることが前提になるのではないかと思われる。

②作業所型地域活動支援事業とU会の活動目標とのずれ

U会の活動はもともとは、活動の拠点として場所が必要だという点に始まっている。U会のようにある程度の組織的な活動をめざす団体には、活動の拠点が必要であった。安く借りられる場所を探したが、なかなか見つからず、そのために、市の作業所型地域活動支援事業の制度を使う必要が生じた。当初は、その作業所で作業を行いながら、それを軌道に乗せて、それから、独自の企画や事業を広げていこうという意図であった。しかし、その作業所自体の運営に当初予想した以上の労力をとられた。制度上、一定数の利用者を集めることが次年度の補助に影響を与えるという縛りあり、それが、作業所の運営に不慣れな当事者が集まりであったU会には負担であった。また、行政へ提出する事務書類が多くあり、その作成に時間と労力を取られてしまった。特に施設長のMさんには、過大な負担がかかった。

結果的に制度的な縛りが、U会が当初持っていた活力を奪ってしまったと言える。作業所という縛りをつけられずに、当事者たちが活動の拠点をもっと自由に安く借りられる制度があれば、U会の苦労はなかったろうし、活動はもっと発展を遂げ、ユニークな活動と福祉文化発信を続けていたであろう。

6 U会の分離後のX会の再生と現在

このU会に参加しなかった患者会X会のほうは、これ以降、SさんがX会の代表になり、方向性を模索するようになる。Sさんの略歴は、かつて、会社に勤めている間に統合失調症を発症し、会社を退社した後、病院に通いながら、患者会活動に生き甲斐を見い出しているひとである。学生時代に学生運動をした経験があり、また、会社時代に、山の会を組織した経験がある。

Sさんは、発病後、健常者のように働くことは、自分は難しいと感じ、しばらくして会社を辞め、障害厚生年金で生活し、作業所に通いながら、複数の患者会に属し、その組織での仲間づくりに生きがいを見いだしている。Sさんは、このような生き方のかつて「この業界で生きていく」と語った。Sさん自身は、患者会の活動は、仲間を作っていくことの楽しみであるという。Sさんは、このX会のほかに、病院のデイケアのメンバーで作られた患者会組織Q会と障害者も健常者も含めた行楽の集まりR会に関わっている。(この二つの会とX会のメンバーには重なりがある)

活動を行うにあたって、課題になったのは、活動の場所であった。Oさんからの資金援助の継続が難しくなり、U会が、NPOを立ち上げ、活動場所を独自に見つけると、X会は自分達で活動の場所を見つけなければならなくなった。この間、X会内部で場所をどうするかについて幾度か話し合いがもたれ、それぞれの意見が出されたが、結局、便利さと経費の面で生協会館の一室を毎回、予約して、借りていくことになった。これが現在まで続いている。活動場所と活動日が確定することによって、活動の基盤ができた。

会の会計は、会に参加するごとに100円の参加費を集めることと、支援者からの寄付金、臨時的に、メンバーの講演会費の一部などが収入である。ここから、場所の借り賃が支出される。定期的に確実に収入が見込めるのは、会の参加費だけである。今のところ、赤字になることはないが、会の運営にとって会計の安定は課題である。

会の役職としては、代表、副代表、会計がある。しかし、Sさんは代表という言葉を避け、連絡係だと名乗っている。実質的には、Sさんが会の運営の調整役である。また、主要なメンバーが事務局を構成し、現在5名で、会の始まりの前に会合を持ち、案件の検討や、必要なことを話し合っている。

パンフレットを発行し、そのなかにX会の歴史と、Sさんの「ひとりじゃないよ」という言葉が書かれている。これは全精連の言葉をSさんが参考にして書いた言葉である。このパンフレットを、市の各区の保健所などに置いてもらっている。

会のミーティングは、毎月の最終土曜の昼から3時間ほど行われる。その日によって違うが、いたい10名前後の参加がある。ミーティングはその場で司会と書記が決められる。それから議題が集められる。Sさんが全精連の大会に出た時に、近況報告というやり方を知ったことがきっかけで、X会でも、最初に近況報告が行われる。

ミーティングでは、様々なことがその場の話し合いで決められる。会の行事、会の運営に関して大抵のことは議題として取り扱われ、議論に付される。そして、意見が分かれるときは、当初は賛否を挙手で行われていたが、最近では、挙手による決定は少なくなっている。話し合いによる決定が重視され、民主主義的な運営がされている。ミーティングは、時に、まとまらず、話が脱線することもあるが、それでも、皆が合意することを大事にしている。この点がこの会の大きな特徴であり、精神障害者が自分たちで自由に意見が言え、自分たちで物事が決められる場であるがゆえに、メンバーの自主的な参加を促していると言える。全精連への参加も皆で意見を出し、決定している。

しかし、当事者だけの活動は、限界があり、時にメンバー間で意見がまとまらなかったり、方向性を聞かれたときに筆者が相談にのり、アドバイスをすることはあるが、リーダーシップをとることはない。あくまでもメンバーの自主的な話し合いに任せている。

会の活動としては、親睦活動として、これまで、食事会、カラオケ、野球観戦、行楽、ボー

リング、忘年会、初詣、花見、街のウォーキング、ビアガーデンの会などが行われている。そのほかの活動としては、活動が知られているクリニックや作業所の見学訪問なども行っている。また、月に一回、夜、集まる会ももたれている。これは、昼間働いている人が、昼間の会には行けないので、夜の会を作ろうとしたことが発端であるが、必ずしも働いている人ばかりでなくなっている。また、かつて、ボランティアの人が中心になって、当事者講演会を一度行ったことがある。また、ミーティングで決まったことを通信にして、メンバーに発送、送信している。Sさんは、この通信ができたことで、会が患者会らしくなったとしている。

会はその後、Sさんが少し体調を崩し、また、年齢が高年齢になってきたこともあり、会の調整役割をうまく果たせない事がしばらく続いた。その時は会の運営、方向などについて事務局のなかで話し合いがもたれたが、会のまとまりがなかなか得られなかった。会全体の調整役がいなくなり、筆者も、意見を求められ、いろいろ提案して、会の運営をうまく進めようとしたが、かえって混乱を招いたようなところがあった。

しばらくして、それまで男性会員が多かったが、会に新しく女性のメンバーが入って雰囲気が変わったことも一つの契機になって、会自体にまとまりが再び出てきた。Sさんが全体の調整役という役割から少し離れたが、会全体に自然なまとまりが生まれ、自由に発言できる雰囲気が再びできてきた。この間、筆者自身が都合で参加できなくなったが、それがかえって自分たちで何とかしなければという雰囲気が生まれ、自然なまとまりが生まれていったと思われる。この自分達で会の危機を乗り越えるという経験が重要であると思われる。現在も、会は、毎回10名前後の参加があり、I市からの参加者もあり、X会の活動を参考にしたいということで参加する人もいる。

特に対外的な働きや活動をしているのではなく、仲間同士の親睦と悩みの分かち合いという性格を持っているが、それが、全員の参加の中で民主主義的に進められていくのが特徴である。また、Sさんがいることが、全体の雰囲気をやわらかくしている。Sさんのやわらかく穏やかでユーモラスな雰囲気が、全体の自然で対立のない和やかな雰囲気を作っている。Sさんはその意味で表出的リーダーになっているといえよう。

Sさんには、皆の意見を聞きながら、民主主義的運営をしていきたいという方針があり、それが、皆のなかで支持されて、自然と民主主義的な運営がされるようになっていった。X会の副代表で、X会に以前から関わってきたBさん（男性）は、U会と分離後にX会のなかで民主主義的雰囲気が生まれてくる過程について次のように述べている。

とにかくあの誰か一人が決めちゃうんじゃなくて皆で話し合おうっていうそれはすごいごく自然的に発生したものだからよかったかな、ただし例えばその後の問題はありましたけど、除籍の問題とかそういうのありましたけどそれは皆で話し合って決定した事だからっていう事で言いやすくなりました。

質問 ある程度Sさんの性格がでてる、それとも全体の雰囲気として？

全体ですよ、だからその僕はそこに成長、要するにX会が成長したのはそこだなと思いました、その部分で成長したかな、それはよかった。

Bさんは、民主的な雰囲気が自然に生まれてきたとしているが、そこには、代表のSさんの考えが反映されていると筆者は考える。

BさんはX会が、民主的になったのは、自分たちで会を回していかなければならなくなったのがきっかけであるという。

やっぱ僕らも僕らなりに考えた、勉強させられた、要するに誰も援助してくれない状況に追い込まれたから何とかしなきゃいけない危機意識みたいなのはあったと思います、どうかしないと存続そのものが危うくなっちゃうっていう事ですよ。

Oさんからの援助がなくなった分、不安定になったが、それだけ自分たちで何とかしなければならぬという雰囲気が生まれ、援助がなくなった代わりに自由を得たとBさんは述べている。

Sさんは、民主主義の原則として多数決で決めても、実際に、それに従って実効性を持って組織が動くことばかりではなく、民主主義的な進め方とリーダーのリーダーシップの発揮は、必ずしも一致しない場合があると述べている。Sさんは、民主主義は少数派の尊重であるという理念について、それはどういうことだろうかと自問をしている。Sさんは、能力のない人間をリーダーはどのようにしたらいいのか、民主主義を尊重して、その人の意見も聞いていると、会が進まないことがあるとしている。しかし、最終的には、どんなメンバーにも話をし、皆に納得してもらって、進めることが大事であるという考えで、単なる多数決で決めることに疑問を持っている。

Sさんは、自分は代表ではなく連絡係だと公言している。Sさんによれば、代表というのは組織を代表するものであり、責任能力を伴うものであるが、自分は、そのような責任能力がなく、ただ連絡する能力があるという意味で連絡係を名乗っているとしている。また、代表というのは権限を持つが、そうすると独裁になる危険性があり、自分はそのようにしたくないとしている。しかし、実質的には、Sさんがメンバーの調整的な役割を見えないところで果たし、会の円滑な運営を進めていた。

筆者は、このU会離脱後のX会の特徴は、日本の伝統的な集団の全員一致の原則をもつ集団であると考えている。対立を好まず、できるだけ人と人との間柄を大事にし、和を保つという日本の集団の一つの形がX会にはあると言えよう。それは、タテではなくヨコの原理でつながる水平の組織と言えよう。その運営は多数決よりは全員一致までの話し合いという方向に向かい、民

主的である。会は、上部の団体や調整機関をもたず、病院やデイケアの中に作られた患者会ではないという特徴があり、組織として自主性・自律性を持つ団体であると言えよう。メンバーのなかで逸脱する行為があったりしても、自分達でその危機を乗り越えている。そして、日本的な和の集団という特徴を持ちながらも、排他性、排除性を持たないという特徴も備えている点が注目される。加入も脱退も自由で、メンバーの中には他の患者会に顔を出していたり、作業所をいくつか回っている人もいるが、そのことに関しても自由であり、何か否定的な見方をされることもない。これは、Sさんの会に来るものも会から去るものも自由であるという考え方が反映されていると思われる。

会が排他的・排他的でないことは、メンバーに自主性と自由性をもたらしている。

X会に一つの課題があるとしたら、メンバーの中で逸脱的な行為が見られた時にどのように対応するかということである。Sさんの皆が合意することを前提とする運営方針は、その逸脱的行為者本人の同意も必要となってくるため、その人が強い反対をした場合、会のなかの意見調整が進まないということになる。会則では、妨害行為を働いた者に対する罰則規定があるが、細かいところまで規定はされていない。しかし、あまり細かい会則を作っていくと、会が官僚制的な組織になっていく危険性があり、現行の緩いおおまかな会則で、運用を民主主義的に進めていくのがよいのではないと思われる。現に、そのような逸脱者が現れ、混乱が生じた時があった。しかし、なんとか危機は乗り越えている。X会は、問題が生じたとき、上位団体や福祉関係機関のなかに丸抱えされていないので、自分たちで解決しなければならないというリスクがあるが、そのリスクがあるがゆえに、会として成長していっているといえよう。リスクを背負うことで組織としての自律性を育て、メンバーに自由と自主性をもたらしていると言える。

この会は、セルフヘルプグループとして、メンバーにどのような影響を与えているのであろうか。Sさんは自分にとってのX会を次のように述べている。

うーん、なんかあれ、1つの光だね。あの病気になってどうしたらいいかさっぱり解らない、その時にああ、あそこに光があると、その光を求めていくのがX会じゃないかな。

あの1人で悩んだよね、で引きこもるんだよね、それをX会という所へこれば、ああ自分はどうやって生きてけばいいかってのが、どうやって闘病というか病気を治すのにどうやって生活してけばいいかってのが仲間がいれば仲間がこういう生活をしてきたってのがわかる。

やっぱり病気の先輩がほしかったよ、病気の先輩の話が聞きたい、それで今は自分が病気の先輩だもんで病気の後輩に僕はこういったことをしてきたよっていう話をしたい。

また、Sさんにとっては、X会という場が、自分の生きがいの場所であり、自分が認められる場であるとしている。また、BさんはX会の自分への影響を次のように語る。

質問 人の見方とかに、どう接するかっていうことで変わったことがありますか？

あーあー変わりましたよ。あの僕はそのやっぱり世の中のことをあんまり勉強してないなっていうのがあって、あの、すぐ人を信じたりとか、しちゃうんですね。ですから、その辺では、すぐ信じちゃいけないだなんていうのは、ちょっと学んだような気がします、X会で。¹³

Bさんは、X会という会を通じて、他者との関係形成能力を得ていったといえる。

SさんやBさんのこれらの言葉から、X会を久保があげたセルフ・ヘルプ・グループの5つの特徴と比較すると、最初の3点がX会に当てはまると言える。すなわち、

- ① 人間同士の感情の開放と支え合い。
 - ② メンバーが成長する 他者を援助することで、結果的に援助する人が利益を得ている。すなわち、自分が積極的な役割を担うことによって、新しい経験を獲得し、それがその人を成長させ、自信を得させる。
 - ③ 自分の生き方のモデルとなる人に出会い、将来の予測ができる。
- しかし、X会全体の活動を見てみると、久保があげた後の2点はそれほど強くは当てはまらないと言える。すなわち、
- ④ 役に立つ情報が得られる。社会の中で自分達の置かれている現実（医療・教育・社会福祉・就労など）を知り、学び合うことができる。
 - ⑤ 社会に向けて働きかける。関連する制度を作る

④は筆者が時々資料をもって話をすることがあり、また、それぞれのメンバーが全精連や家族会の会報、また精神障害者関連の催し物の連絡などを行っている。しかし、情報を集めて伝え、現実を学び合う雰囲気はまだ弱いと言える。メンバーが個人的に見てきたり聞いてきた作業所などの情報をミーティングで話すことはあるが、それはまだ、部分的である。

また、⑤の面については、X会は、ほとんど行っていないと言える。一度だけ、家族会からの呼びかけで、いっしょにバス運賃の割引を行政にかけあったことはあった。しかし、対外的に活動することはそれ以後ない。ただ、X会には市の障害者施策に関連する会議に精神障害者からの代表をX会から出すように行政から声がかかり、メンバーの一人が参加していた。しかし、そこで話し合われたことがX会に持ち帰られ、話し合われることはなかった。

今後、X会がどのような方向に向かっていくかはわからないが、Sさんが代表である限り、大

きくは今の傾向は変わらないと思われる。

7 考察

U会とX会の集団・組織としての目的を見ると、X会は、居場所や親睦的な目的が強く、また、悩みの分かち合い的な側面も持っている。特に行政に働きかけたり、他の団体に働きかけて制度を変えようとする志向は弱い。他方、U会は、居場所的な側面も持っていたが、コンサートや講演会、通信の発行など精神障害の啓発活動、自立支援、就労支援という目的としていた。親睦的な側面と同時に、目的がありそれを達成する活動体という性格を持っていた。U会には親睦的組織と目的達成型組織の二側面があったと言えよう。これを言いかえるなら、基本的に両者はセルフヘルプグループとしての基盤を持ちながらも、X会は、「そこにいること、そのままあること」が特徴としたら、U会は「なにかをすること」が特徴であると言えよう。

これは、ある程度、中心メンバーの障害の種類によって影響を受けている面があると言える。X会の中心メンバーであるSさんとBさんは統合失調症であり、この病気はどちらかというところ穏やかな静かな環境を好む性向にあるが、他方、U会の中心メンバーであるMさんとCさんは、躁鬱病で、病気の特性としてどちらかというところ目的を設定し、それに向けて行動していく性向がある。それが、X会の「そこにいること、そのままあること」、U会の「何かをすること」というそれぞれの集団の特徴に影響を与えていると思われる。

他方、組織化の程度を見ると、X会は、三役と事務局体制があり、規約を持っているが、とくに複雑な組織となっておらず、それぞれの役職や事務局の権限もとくに明文化されているわけではなく、それはあくまでも運営上のものであって、メンバー同士は緩やかな横のつながりという特徴を持っている。他方、U会は、NPOと作業所を持ち、NPOの定款を持ち、理事会、運営委員会などがあり、作業所も施設長、職員の体制があり、一定組織化された団体となっている。

財政的には、X会は、会費と寄付金を中心であり、そこから場所代や活動の補助を出している。今のところ、赤字になっていないが、財政をどう安定させるかが課題である。メンバーごとに経済的事情が異なり、少しの会費値上げも、負担増になるメンバーがいると思われる。他方、U会は、NPOの会費、行政からの作業所への補助金、社会福祉協議会などからの企画補助金などが収入の中心であった。補助金があることで、比較的安定した財源があったが、行政からの補助金には縛りがあり、作業所運営に限定されるため、NPO独自の活動には社会福祉協議会からなどの援助が必要であった。また、補助金に関する事務量の多さも問題になる。財政は、先行研究でも見たとおり、多くの精神障害者のセルフ・ヘルプ・グループの課題である。

場所も大きな課題である。定期的集まれる固定した場所がある事が会の運営にとっては重要である。X会の歴史を見ていくと、この場所をどう確保するかが、一つのキーポイントになって

いることがわかる。Oさんという存在は、場所の提供という意味が大きかった。しかし、他方で、U会もX会もその活動を活気づけたのはOさんの資金的支援がなくなったとき場所をどう確保するかという危機意識であった。これは、「すみれ会」の事例でみた場合と同じである。場所の問題は、財政的に弱いセルフ・ヘルプ・グループの場合、それをどう確保していくかが、重要な問題であり、それが、単に場所だけの問題だけにとどまらず、それが会の存続か解散かという問題になることによって、会の結束を高める契機にもなりうるということを示している。X会はこの場所の問題を話し合う中で、会のまとまりを作り出していった。また、U会も場所をいかに確保するかという危機感が、その活動の原動力を生み、メンバーの結束を生んだ側面がある。しかし、他方、U会は、行政補助の道を選んだことが、作業所運営という負担を負うことにもなり、結果的に、活動を継続的に発展させていくことの一つの障害になったと言える。

活動場所に関して、行政はもっと、安く、そして活動の制限を設けない施設を作るべきであろう。X会、U会に限らず、行政が中心になって、NPO団体や市民団体、セルフ・ヘルプ・グループなどが自由に使える公的な施設をもっと作るべきである。そうすれば、さらにセルフヘルプグループが増え、自由でユニークな活動が生まれて来るであろう。現在、行政によっては空き店舗を有効利用させようとする動きがあるが、もっとそのような場所で、セルフ・ヘルプ・グループやフリースペースを使えるように行政が取り計らうえば、その活動が発展していくであろう。

専門職との関係を見ると、X会の草創期には、専門職の果たした役割が大きかった。この点は、先行研究通りである。X会も、U会も、Oさんからのサポートが弱くなると同時に、その危機を転機に変え、自主性を強め、活動を発展させていった。専門職が離れることで、会員の自主性が育っていった。この点も先行研究の指摘通りである。そして、専門家が離れた後は、X会は、親睦を中心とする集団であるために、専門家の支援を必要とせず、その活動に自主性が生まれていくようになる。X会には、必要に応じて筆者がアドバイスするが、それ以上の関わりはほしくないというスタンスが、会からも求められていると言えよう。

一方、U会は、作業所運営を始めると、専門的な知識を持った職員が必要になる。専門職の職員がメンバーの上に立つことなく、健常者と障害者という枠組みを越えようとした点は評価されるが、一定専門的な知識と援助が必要な時に、専門職の能力がうまく発揮されなかったという問題があった。U会の当事者主体の理念をうまく反映できるような専門職とメンバーとの関係、そして組織の中でのその位置づけと運営体制ができなかったことが、問題であった。それは、組織を作る時の準備不足もあるが、作業所などの組織運営することに当事者も含めてメンバーが慣れておらず、経験がなかったことが大きい。

運営方法については、U会については、民主的な運営がされていたかどうかにか課題があった点はすでに述べた。一方、U会の離脱後のX会は、その組織の性格からして、目標達成型の団体でなく、組織化がそれほど進んでいないこと、また、職員と障害者という異なった性格の成員か

ら形成されていないことなどから、U会ほど、意志疎通と内部調整の必要は少ないと言える。しかし、それでも、組織であるからには、活動の決定、財政のこと、会の中で逸脱行為をするものへの対処などの調整は必要になってくる。その場合、民主的な運営を、Sさんやメンバーが選んでいったことが重要であると考ええる。

上位団体との関係において、この両者には、どこの上位団体も持たないという大きな特徴がある。それは、病院や家族会とは直接は関係がない精神障害者の当事者の団体である。また、当初は、X会の方向性が決まらない時は、形の上でU会がX会を支援する上位団体的な性格を持っていたが、X会が自ら自主性・自治性を帯びて来ると、X会も上位団体を持たないそれ自身独立した集団となる。この点において両者は、岡の言うような、既存集団丸抱え型集団、すなわち、特定の上位集団の影響下にはない独立した集団である。自分達で決定し、自治的に活動を進めていく団体である。それが、ある意味で自由さと自主性をもたらしている。

岡は、セルフ・ヘルプ・グループとして、「あつまり」ではなく、「まじわり」が必要であり、一人一人自立して、明文化されたプログラムがあることが重要であるとしている。そして、情緒的な一体感を持ち、どこまでの範囲まで関係としてつながるのか制限がない、日本的な「あつまり」はそこに属しないと、居場所がなくなり、排除されてしまう危険性と背中合わせであるしている。

U会もX会も、そのような運命共同的な所はなく、加入も脱退も自由である。

特にX会は、その運営のあり方は、意見が異なっても、多数決よりは、話し合いなかでの合意を重視しており、そこには全員一致と和の原理という日本的な集団の特徴があると言えるが、それは何かを転機に排他的になったり、自分を抑えるという抑圧的になってしまうようなことはない集団特性であると言える。セルフ・ヘルプ・グループという時に、必ずしも、岡の言うような明文化されたプログラムを持ち、一人一人が自立性があることがその特徴ではないののではないか。

また、岡は、日本的な丸抱え集団の場合、複数の集団に属する事は出来ないとしているが、X会のメンバーのなかには、それ以外に、作業所とかボランティアとか他の患者会、趣味の会など相互に独立性のある複数の集団に属しており、居場所を複数持っているメンバーがいる。そのような複数集団所属は、メンバーに選択の自由を与え、それが生き方の自由をもたらしていると見え、QOLの向上につながっていると考える。

外部の福祉機関との連携の問題に関しては、同じように精神障害者が中心になって作業所などを運営している「すみれ会」と比較した場合、U会の場合ほうまくいかなかったと言える。もし、様々な福祉・医療関係機関との協力関係が構築され、専門職の支えと健常者の参加がもっとあれば、U会は大きな活動体になっていただろう。

しかし、他の障害当事者の団体と協力関係がうまくいった面があり、それが、活動を大きく助

けた面があったことも確かである。講演会などの場所の提供、第三種郵便の取得、ヘルパー派遣業務などで身体障害者の自立支援を行うPの協力があったのは大きかった。全精連は、講演企画の依頼とその予算的支援はあった。しかし全精連からはそれ以外は特に支援されることはなかった。

他方、X会は、保健所からの紹介で、新しくメンバーが来ることがあり、また、保健所との接触は持っている。行政の出す福祉団体の情報にも、患者会として紹介されており、行政からは一定の信頼は受けているが、直接、行政や保健所からのサポートは受けていない。また、区の家族会のメンバーから寄付を受けることがあり、緩いつながりを持っている。

X会について、課題は、そのメンバーのなかに20代、30代のメンバーが少ないことである。若いメンバーが時々訪れることがあるが、定着しない。若い人が少ないことは、今後の会の継続を将来的にどのように進めていくかという課題をもたらす。

また、代表であるSさんが今後高齢になっていき、いずれは引退することになるが、その時に会の存続がどのようになるかを今から準備していく必要がある。Sさんの柔らかな性格と人柄が、会のゆるやかで自由な雰囲気を作っていることはすでに述べたが、X会が今後もこの特徴を継続していこうとするなら、どのように次の会のリーダーや組織運営を進めていくか今から準備を進めていく必要があると言える。

以上二つのセルフ・ヘルプ・グループの活動の紹介とその特徴を比較検討しながら問題を整理してきた。さまざま問題がそこに隠されているが、当事者のセルフヘルプグループとは何かという問いを立てるならば、焦点は、自主性をどのように持ち、また、メンバーが自らの団体をどのように民主的に運営していけるかという点にある。そしてその点は、専門家・外部の福祉行政機関・団体がどのように協力・支援していくかという問題と大きく関わっている。その意味で、U会の掲げた当事者主体の理念の実現は、いまだ未完であるというべきであろう。

注

1 久保絃章「セルフヘルプグループとは何か」p.4

久保絃章 石川到覚『セルフ・ヘルプ・グループの理論と展開』中央法規 1998

2 同上 pp.4-5

3 同上 p.8

4 岡知史「日本のセルフ・ヘルプ・グループの基本要素－『まじわり』『ひとりだち』『ときはなち』」
社会福祉学 第33巻第2号 p118~136 1992

5 同上 p121

6 同上 pp.125-126

7 同上 pp126-129

8 河野仁志「精神障害者当事者組織の生成と展開の記録すみれ会小誌(1970-1994：札幌)」教育学部紀要

1994 p246

- 9 三田優子、大島巖、山崎喜比古、園田恭一「精神障害回復者のセルフ・ヘルプ・グループの実態と意義」
社会医学研究 第10号 1991
- 10 河野前掲論文
河野・深澤・上野・安達「精神障害者の患者会『すみれ会』」OU会ジャーナル Vol 31 No 4
pp.335 - 339 1997
- 11 「私たちの活動、そして思い」これは県の冊子でNPO団体の紹介の部分でMさんがU会について書いたものである。
- 12 U会の通信 創刊号「巻頭言」
- 13 社会学の調査研究方法において、ヒアリング対象者が答えたものを、一字一句正確に記述することで、リアリティをもたせるという方法がある。このインタビューの記述もこの方法論に従っている。

謝辞

この論文を、U会の活動の発展に大きく貢献したが、惜しくも志半ばで倒れたCさん、及び、U会のメンバー、患者会X会のメンバー、そして、それを支えてきた人々に捧げたい。